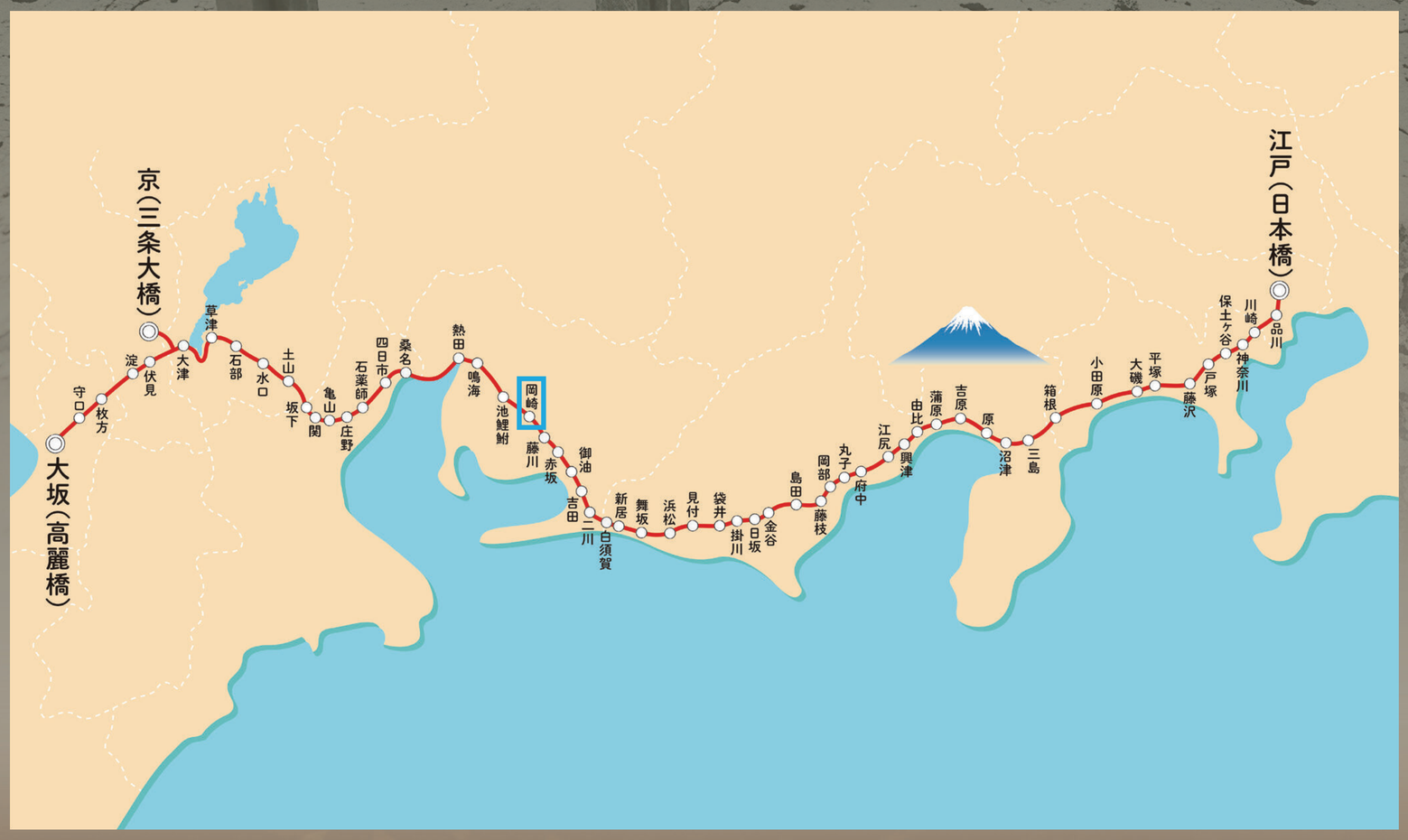
歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

SPOT スポット 10

伝馬町の成立 ～町と制度、それぞれの伝馬～

1600年、関ケ原の戦いにて徳川家康が石田三成に勝利すると、天下統一の安定化を図るために、東海道をはじめとする、江戸を起点に伸びる５つの街道の整備や道路制度の改革を行いました。

1601年に確立されたこの制度を「宿駅伝馬制度」といい、公用の書状や荷物を出発地から目的地まで同じ人や馬が運ぶのではなく、宿場ごとに人馬を交代してリレー形式で運ぶことになります。

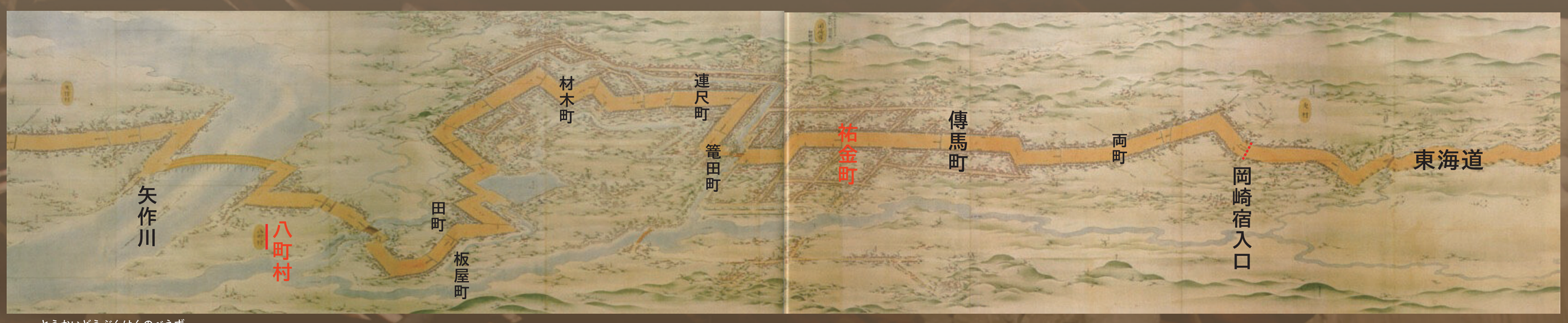


東海道五十七次宿場ＭＡＰ　静岡市 提供

岡崎の地は、東海道38番目の宿場「岡崎宿」として指定をされ、これにより次の宿場まで届けるために必要な人馬を用意しておく必要がありました。

この役目のことを「伝馬役」といい、榎町（現祐金町）がその役目を担い、一方で、領主のための人馬を用意する「人馬役」は八町（現八丁町）が担っていました。

集団移転と伝馬町の成立



東海道分間延絵図に一部加筆　東京国立博物館蔵

1607年８月に大風雨による矢作川の大洪水が発生します。これにより、矢作橋と低地であった八町の町屋が流失するという壊滅的な被害を受けました。被害を受けた八町の住人は、藩主である本多康重へ屋敷の移転を懇願し、それを受けた康重は1608年に城下東部に自ら出向き、町割（今で言う区画整理）を指示します。そうして1609年に、北側には八町の住人、南側には榎町の住人をあてがい、伝馬町が成立しました。これにより、それまでそれぞれの町で担っていた人馬役の役割が集約され、宿場としての機能を大きくしました。

また、八町の住人が伝馬町へ移る際に、家康から与えられていた「塩座の特権」が、そのまま伝馬町へと引き継がれましたが、同じ時期に八町のすぐ近くで、同じく大洪水で大きな被害を受けていた田町が、町を復興するために、塩座を置くことなどを康重へ願い出ました。康重は家康に伺いを立てた上で、その願い出を許可します。これにより、1609年以降においては、２つの町に塩座が置かれることになりました。



本多康重像　長野県飯山市　忠恩寺

ココに注目！

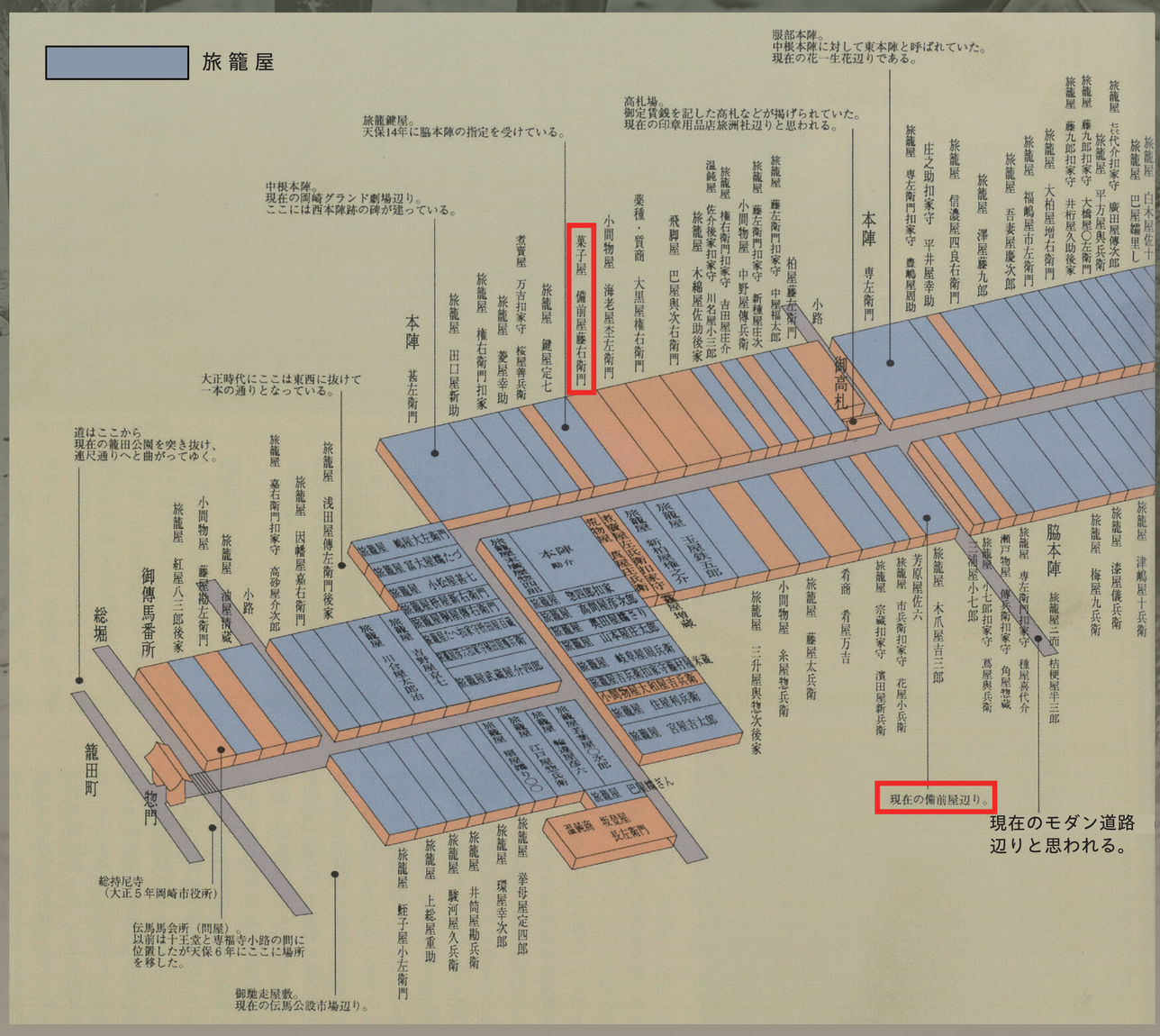
～備前屋の雑学～

1782 年、現代において「銘菓あわ雪」や、「手風琴のしらべ」で知られる菓子舗「備前屋」が、伝馬町で創業します。

創業当時の店舗位置は現在の位置とは異なり、伝馬通りの北側に位置していましたが、1945 年、第二次世界大戦末期の岡崎空襲により店舗が焼失したため、再建をする際に現在の位置へ移った、という歴史があります。

そんな備前屋の店舗壁面には公用である伝馬を利用するための許可証、「伝馬朱印状」に押される「駒牽朱印」のレプリカが彫られており、また、駒牽朱印と銘打ったお菓子も開発・製造されています。

このように、店舗の意匠や、お菓子自体に様々な歴史を織り交ぜ、この地に根付く歴史を、脈々と現代に伝え続けています。



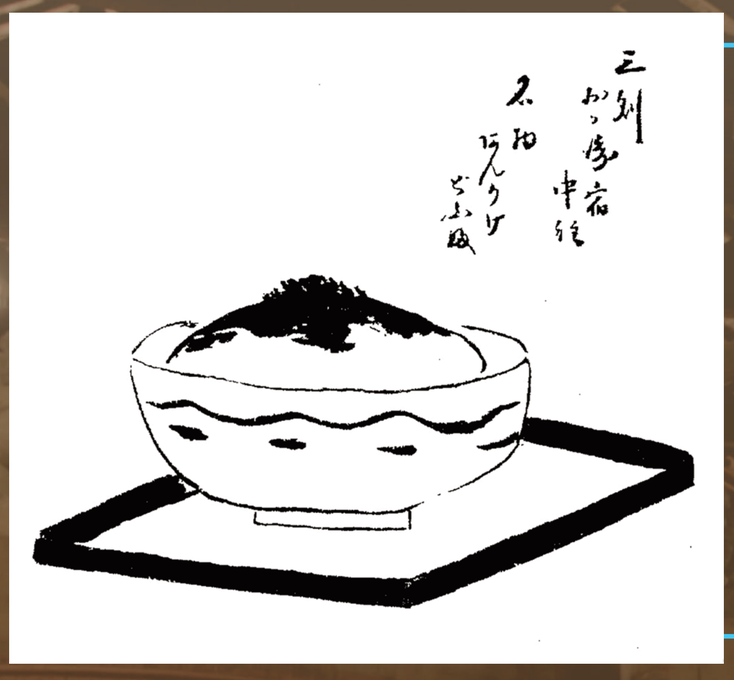
旅籠屋

創業当時の備前屋は現在の位置とは異なり、通りの北側のもう少し西に位置していた。岡崎宿伝馬 P.28,29 江戸時代の伝馬町家並図より抜粋　一部加筆



備前屋本店の南側壁面にある「駒牽朱印レプリカ」

銘菓の誕生秘話と菓子の発展



淡雪豆腐　旧岡崎市史 3 巻 P.229 より抜粋

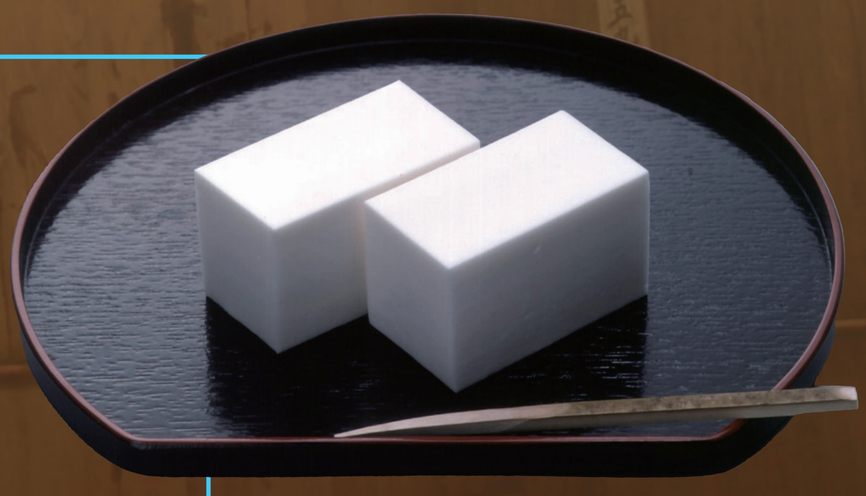
現代において多くの人に慣れ親しまれている、備前屋の看板商品「銘菓あわ雪」。

あわ雪のルーツは、江戸時代（1603～1868年）にあります。

当時、岡崎宿の東入口付近には「あわ雪茶屋」という茶店があり、そこで売られていた「淡雪豆腐」という、だしの効いた醤油餡をかけた豆腐が、東海道を行き交う人々の間で大変人気を博していました。しかし、明治時代に差し掛かり、東海道を徒歩で行き交う旅人が減るにつれ、あわ雪茶屋は廃れ、閉店となりました。

備前屋の３代目当主は淡雪豆腐、そしてあわ雪茶屋のファンであったため、閉店を大変惜しみ、その気持ちから明治時代（1868 年～1912 年）初期に「あわ雪」を創製した、という歴史があります。

現代において備前屋は、あわ雪をはじめとした数々の商品の伝統を尊重しつつも細かな味の改良を続けており、その成長意欲はとどまるところを知らず、岡崎の町に必要不可欠な老舗菓子舗であり続けています。



銘菓あわ雪　備前屋 提供